

平成 3 1 年 2 月 1 5 日

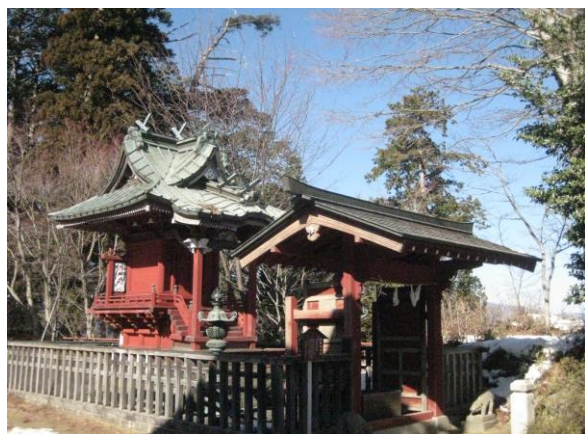
発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

武蔵御嶽神社の皇御孫命社

御嶽神社の境域には小さな神社が数多く鎮座しています。門や玉垣に囲まれた社殿から、簡単な見世棚造といわれる建物など様々ですが、これは、御嶽神社が武蔵国の総社として、この地域の主立った神様をお祀りしているためです。

神社右手に鎮座する皇御孫命社は、天皇家の神祖といわれる天照大神の孫、天瓊瓊杵尊を祀っています。入母屋造で正面屋根を千鳥破風で飾り、一段下がった軒は唐破風の向拝、瓦棒銅板葺の社殿です。神社の拝殿建築にはよく見られる構造で



皇御孫命社

すが、小規模の本殿にこれだけ凝った建物は大変めずらしく、門と玉垣に囲まれた本格的な構造です。ここは江戸時代には、家康公を祀る東照社でした。よく見ると瓦棒の先端や屋根の軒先の飾りは葵の紋です。元禄 12(1699)年の大風で、神社本殿・拝殿が大破し、五代将軍綱吉公により翌年修復された事に感謝し、家康を祀るこの社殿が造立されたと伝えられています。

皇御孫命社の見所は建物だけでなく、本殿と門の間の石畳に生息するホンモンジゴケです。この苔は銅を含む環境を好み、お寺や神社の銅葺屋根の下などに見られる種類で、苔マニアが必ず訪れる場所です。池上本門寺の五重塔付近で発見されたことから、その名が付けられました。



文化5(1808)年奉納の石像

もう一つの見所は、門の両脇に控える狛犬ならぬ猪、文化 5 (1808) 年奉納の石像です。新しく見えますが、平成 8 (1996) 年の台風で北側大杉が倒れ、門・灯籠・狛犬が大破し、青梅市の補助事業として修復されたものです。なぜ猪なのかは定かではありませんが、戦国武将の多くが摩利支天を信仰していました。サンスクリット語でマリシは「陽炎」を意味し、実体がなく捉えられないことから、毛利元就、前田利家、楠木正成、山本勘助らに軍神として信仰され、徳川家康も兜の中に摩利支天を祀っていたといわれます。この摩利支天像

の特徴は、猪に乗っている事です。おそらく、そんなところから家康の信仰する、摩利支天のご眷属である猪が奉納されたのではないのでしょうか。摩利支天を祀る市内の寺社には、今井の正福寺の参道右手にある石像、裏宿神社、高水山常福院の仁王門右側の像があります。特に常福院の像は猪に乗っています。

亥年にちなみ、御岳山や高水山に登山してはいかがでしょうか。

(文責 須崎 直洋)



高水山常福院の摩利支天

